



一之橋から笛吹川を望む。かつては水量も多く、何度も橋が流されては、近在の方々の努力で架け直されたという。

れており、拝殿の天井は、人々の思いが込められた言葉や絵で飾られ、見る人を驚かせる異次元のような空間を醸し出している。

案内板によると、本殿北にある大きな平岩には、日本武尊の伝説があり、小さい神社ではあるが、感動を与えてくれる神社である。

しばらくは新道を歩き、城山トンネルの手前を右に折れ再び旧道を行く。竹林を通り抜けて流れてくる川の冷気が心地良く、民家の間から見えた滝に思わず足が止まる。そばらん滝である。ここから三之橋までの川は、岩と水が削り出した絶景を見ることが出来る。時間があれば川に降りて観賞するのもいい。

三之橋を渡り川を左手に見ながら歩くと、三富村役場南の信号で新道と交差する。道の所要所にある数多くの馬頭観音や道祖神がその昔の往来を彷彿させ、世の中の生活や文

化は変わっても、道と共に暮らす人々の変わらぬ思いに幾度となく足が止まる。

旧道はイノブタ飼育所や清水渓谷を過ぎて、武田信玄公の隠し湯としても知られている川浦温泉に向かう。川浦地区の入口あたりは、観世音菩薩や、道祖神、藁葺屋根の古民家などがあり、旧道らしさがよく伝わってくる。さらに川浦口留番所跡を過ぎ新釜沢橋を渡ると、右側にあるのがお伊勢の宮地蔵である。その昔は道の両側に百体以上の地蔵があり、弘法大師が岩盤に自分の像を爪で書いたとの伝説も残っている。残念ながら現在では数十体のみが残存しているのだが、その姿を見ていると秩父往還として賑わった当時を語りかけているようでもある。

お伊勢の宮地蔵をあとにして新道を少し歩くと、旧道は左に下っていく。天科発電所の脇を通り旧道からいったん離れ、釜口橋を渡って川沿いの道を10分ほど下る。名勝一之釜に至る道である。

道路脇の一之釜の看板に沿って整備された道を川に降り、吊り橋を渡ったところが一之釜の滝である。人間が作りだした物は僅かな

一之釜の滝である。人間が作りだした物は僅かな



山梨の旧道を訪ねて

一道一会
(三富村/雁坂みち)

かつては開かずの国道と呼ばれ、日本最古の峠道を有していた国道140号・雁坂みちは、近世まで藪や生活物資を背負った人々が往来する文字通りのシルクロードであった。整備された国道を縫うように交錯する旧道を、三富村一之橋から歩いてみた。

雁坂みちは笛吹川沿いに走る現在の国道140号。その昔は秩父往還と呼ばれ、日本武尊が甲州から碓氷峠に兵を進める際に通ったとの伝説が残るほど古い道である。

今回は牧丘と三富の境、笛吹川にかかる一之橋から雁坂みちの旧道歩く。橋から見ると川は巨石の岩肌を滑るように流れ、静から動へ動から静へと見人々を飽きさせない。緩やかな上り坂に沿ってバス停跡や工場跡を見ながら進むと、この道が街道であったころの様子うかがい知ることが出来る。地元の人々の話では、本来の秩父往還は暴れ川であった笛吹川を避けるように、川の対岸にあったとのことである。時代の流れの中で人々はこの川と向かい合い、「一之橋」「二之橋」「三之橋」を何度となく架け替え、道をつないで来たのだろう。その橋は今、すべてが近代的で強固な橋となっている。

川の音やセミの声を聞きながら二之橋を過ぎて、しばらくすると旧道は新道と交わり、さらに数分ほど歩いた所に飛尾神社がある。この神社の本殿は、四面は見事な彫刻で覆わ



旧道は現在、地域の生活路としての役割をはたしている。庚申塔や道祖神、馬頭観音、地蔵も数多く残る。



お伊勢の宮。新旧さまざまな地蔵が並び、信仰心を感じさせる。かつては100体以上あったというが、数が減ってしまったのは、つくづく惜まれる。



名勝「一之釜」は、今でも名勝の名に恥じない威容である。